らもれたるにこそあらめ、皆いとふるければ、月次の定まりし世よりのなるべし、萬葉集にはおほく見えたり、

此名ども、もろこしのにならはゞやがて正月、二月、三月などとこそつけらるべきに、さはあらで、あらたにまうけて、むつき、きさらぎ、やよひなどとしもつけられたるは、上にいへるごとく、物の次第を一二三などいふことは、古はなかりし故なり、

さてかく月次のさだまりて、月々の名ども、出來つれども、かの天の月による月と、此月次とは、別事なりし、又いくかの日といふ日次、一月の日數の定まらざりしなど、これらはなほ本のまゝにてなむ有ける、

〔續和漢名數時候〕十二支配十二月　正月寅二卯三辰四巳五午六未七申八酉九戌十亥十一子十二丑

〔東雅一天文〕月ツキ　正月ムツキ、二月キサラギ、三月ヤヨヒ、四月ウヅキ、五月サツキ、六月ミナヅキ、七月フヅキ、八月ハヅキ、九月ヂガヅキ、十月カミナヅキ、十一月シモツキ、十二月シハス、義共に不詳、我國の月名、太古よりいひつぎしことばとも聞えず、舊事記に、邪神の音サバへなせしといふ事三たびみえたり、それが中二ツは狹蠅の字を用ひ、讀てサバへとし、一ツは五月蠅の字を用ひ、讀事狹蠅のごとし、さらば上宮太子の比ほひ、五月をよびてサツキといひし事、既にありしにや、其餘のごとき、いかにやありけむ、陰陽の二神、日神、月神を生給ひしに、其月神の御名、一ツには月讀とも申せしは、上古の語に讀といひしは、後世にカゾフルといふことば也などもいひ傳へたり、月の數をかぞへいはむには、かぞへいふ所の名なき事をも得べからず、天地より始て、凡物の名に至るまで、後世にいふ所のごとき、上古にいひし所のまゝ也とも見えず、古をさる事の久しくて、世のうつりかはりぬるに隨ひて、いふ所も又うつりかはりぬる故也、たとへば初空月、梅見